アメリカ文学紀行

——アーネスト・ヘミングウェイとテネシー・ウイリアムズ——

丸　田　明　生

1．デトロイトへ

1991年の夏，私は14年振りにアメリカを再訪することとなった。14年といえばかなり長いという気がするが，その間大学での責任ある仕事の連続と，家庭では子供達の高校，大学時代にあたる重要な時期とが重なって約1ケ月という期間さえも自由にとることが難しかったのだと今振りかえってみて思うのだ。しかしその間少しずつでも研究を重ねてきた作家達がそれぞれ生み出した作品の舞台を訪ねることが次第に私の胸の中で大きくなっていた。勿論第1回目のアメリカで私はある程度その目的を果たしているが，まだ残されているもの，そして新たに現われてきたものも多くあった。14年の間に水は貯水池の水位をどんどんと押しあげていたのだ。私の中には現場を見なければ研究も進まないといっても過言ではない何物かがあった。だが14年のブランクは，アメリカという巨大な世界への一抹の不安をあらためて抱かせたのも事実である。しかし「何でも見てやろう」というかつてのある本のタイトルがちらと脳裏をかすめる。

1991年8月29日下関発。東京にて一泊の後，東京駅地下四階から「成田エクスプレス」にて成田空港に向かう。約一時間にて空港に着く。全席

指定で荷物置場の完備した車輌はよくできている。新幹線などにも大型荷物置場を設置したらよかろうと思う。

12時少し前にターミナルビルに降り立ったが，その混雑といったら——あとで利用することになるアメリカでの各都市の空港と比べてその混みようは著しい。それも多分滑走路がまだ一つしかないせいであろうし，ゲイトから飛行機に乗り込むまでも空港内バスを利用しなければならないという不便さもある。この点ではアメリカの空港に比べて劣っているし，空港施設内の清潔さも決して満足すべきものではない。乗客の多さに多少はよるかも知れないが——。

そしてまた空港ビルのレストランも大変な混みようだ。できればこのビル内で食事をする予定などしないほうが賢明だ。

私の乗ったノースウェスト機は，予定時間より一時間以上遅れてデトロイトのメトロ国際空港に向けて離陸した。何分離陸しようとする飛行機が列をつくって順番を待っている有様である。午後5時過ぎに離陸したNW 12便は，偏西風にのり一路東へと向かった。やがて雲の上から夕日の沈むのが感じられたかと思うと，あたりは薄暗がりに包まれていった。私もできる限り眠ろうとしたが，これがプラスになったか，マイナスに働いたか，神のみぞ知るといったところである。そして間もなく空が白み始め，昼間となった。短い夜である。デトロイトに降り立ったのは現地時間午後3時。日本時間でいえば午前4時。所用時間は約11時間ということになる。どうやら無事アメリカに再び降り立ったわけだ。やはりアメリカは日本の裏側という意識があるので言ってみれば「不思議の国」のような気がしないでもない。そして税関を無事通過してほっと安心する。

私がデトロイトに降り立ったのは，ヘミングウェイの短編集『ニック・アダムズ物語』の舞台となった北ミシガンに最も近い国際空港であるということ，幸いにもデトロイトに近い University of Michigan の所在地であるアン・アーバーに息子夫婦が住んでいるためでもあった。私は空港で

息子の嫁さんに出迎えられた。

メトロ国際空港からアン・アーバーの息子夫婦のアパートまでは小一時間のドライブである。そしてそのアパートは自然林もそこここに残されている広い芝生の中に白い4所帯の入居する建物が程よい間隔で，しかも皆同じ方向を向かないように美的感覚を取り入れて建てられている大団地である。しかし土地が極めて広く，日本的な団地という感じがしない。そこここに池があり，その団地内で散歩やジョギングもできそうである。そして先程述べた Natural Woods からは時々栗鼠が愛想よく芝生に現われてくる。

その夜は息子の嫁 Moto さんの心のこもった料理に舌鼓を打ったが，体の調子の方は完璧とはいい難い。何か胸につかえるような気分で，夜もよく眠れなかった。時差による体の変調であるらしい。このようなことは14年前にはあまり感じなかったように思うが，身体の調整能力は年令に確かに関係しているようだ。

2．ウインダミア（ヘミングウェイ家の別荘）とペトスキー

8月31日土曜日。息子が Labor Day（9月の第1月曜日）を入れて3連休なので，Upper Michigan（北ミシガン）に連れて行ってくれることになっていた。ヘミングウェイが幼い頃から両親と共に夏を過したワルーン湖畔の別荘ウンダミア，そして多感な十代のその地の人々との出会い，そしてその別荘から最も近い町ペトスキー（Petosky），そして“Big Two-Hearted River”の舞台となったシーニー（Seney）の町，期待に胸をおどらせながら午前9時に車に乗込む。天気は晴。しかしペトスキーの気温は最高華氏75度（摂氏24度），最低同じく45度（同じく7度）との予報なので，晩夏とはいえセーターの用意をして出かける。そして車は殆ど直線の国道75号線を北へ北へとひた走る。片道3車線。それに殆ど一杯の車だ。時速は平均120km。中央分離帯が極めて広く，反対車線の車は殆ど

目に入らないといっていい位で全くフラットな地面。木立が道路の両側に続くかと思うと，農地が開けているところもある。まだまだ耕せば無限とも思われる広さである。このミシガンには常緑樹はあまり見られない。紅葉の季節にはあたり一面黄金色に染めるといわれる所以であろう。

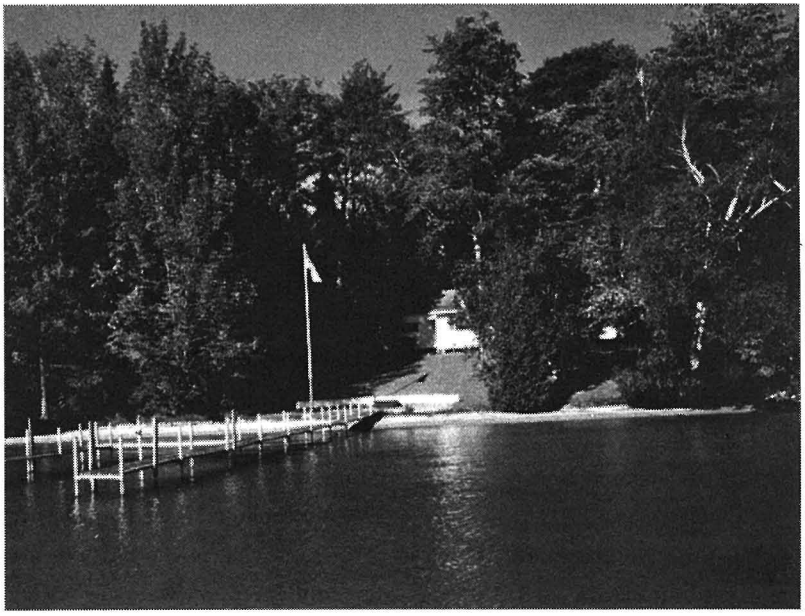
アン・アーバーを出てから4時間あまり，午後1時半にペトスキーの町に入った。さして大きい町ではないが，美しい街並である。人通りも多くなく，ゆったりとした気分にしてくれる避暑地の町といった感じである。家々はそれぞれ色とりどりの華やかさを持ち，一寸セザンヌの絵にみられるような詩情をただよわせている。

昼食にハンバーガーを食べてから Petosky Museum に行く。ミシガン湖の北東端に位置するペトスキーは鉄道線路が風景によくマッチしているが，今ではその駅舎が博物館になっているのである。線路はまだ残ったままだが，それは貨物列車が時折通るためだ。アメリカの田舎町では博物館の陳列品は主として開拓時代の遺品を並べているという程度のものだが，このペトスキーの博物館ではヘミングウェイに関するものが呼び物である。しかし，それといえどもそう多くはないようだった。ただ，この博物館がミシガン湖畔にあるというロケイションが憎らしい程素敵だ。

ペトスキー博物館を見物した後いよいよヘミングウェイ家の別荘，ウインダミア（Windemere）を探しに出かける。午後3時だが，まだ日が暮れるまでには十分時間がある。ここは北半球でしかも緯度が高いからだ。地図を頼りにペトスキーから15〜16km，ようやくワルーン湖がみえるところに車を止めることができた。しかし湖岸に車を駐車することは極めて困難である。湖岸は林に覆われているし，そこに出る枝道は殆ど私道である。ここに別荘を持つ人々が林ごと土地を所有していて，その中に道を作っているからである。そしてその林を形成する樹木は相当の樹齢を持つものが多い。4時近く，陽も西に傾き始めると，あたりはひんやりとしてきていたが，たまたまボートからあがってきた二人連れにウインダミアについて尋ねたところ，やはりある程度ここでは知られているとみえて「あれで

すよ。あの旗の立っている傍の家ですよ」と教えてくれた。それは私達が行った所とは反対側の岸辺であった。早速車を廻して湖岸沿いの道を半円形にたどっていく。

このあたりだろう，と車を止めてみたが，やはりほの暗い木立の中，見当がつかない。対岸から見えた旗も樹が邪魔をしてみつかりっこない。しかし運よく一人の中年の男性が向こうの木立の中の家から出てくるのをみつけ，声をかけると，ウインダミヤは my next door だと言ってくれた。しかし隣といってもその家を見通すことはできない。かなりの距離と，木立のためだ。そして今ウインダミアにはヘミングウェイの二番目の妹サニーが住んでいると言う。私は彼女に一目会いたいという強い衝動を感じたので，そのことをこの隣人にそれとなく話してみたが，彼女は既に85才という高齢のため最近はあまり人に会いたがらないのだ，ということだった。恐らく多くのジャーナリストやヘミングウェイ愛好家とのインタ



ヘミングウェイ家の別荘—ウィンダミア

ヴュー疲れもあるのだろう。しかしこの人は自分の船で正面からウインダミア近くまで漕いでいってやろう，と言ってくれた。親切な人もいるものだ。私達は湖に漕ぎ出し水からその別荘に近づいた。ウインダミアの窓にサニーらしい人影がみえたので彼 Sanback さんが手を振ると，向こうからも手の応答がなされたではないか。「サニイだよ」と彼は言った。顔ははっきり見えなかったが，夕日がウインダミアを美しく照らしていた。この親切なウインダミアの隣人 Sanback 氏は，実は東芝アメリカの Sales and Marketing Manager であった。彼の親切さの一端も我々が日本人故の近親感からのものであったのかも知れない。企業は既に国境をなくしている，の感を強めた次第である。

ウインダミアの家を訪ねることができなかったのは残念なことだったが，その代りにここにアーネスト・ヘミングウェイの姉のマーセリンがその著 *At The Hemingways* に書き残しているこの別荘の描写があるので，ここに引用してみたい。

> The beach my parents selected was sandy and wide; the lake here had a good hard clean bottom and no abrupt drop-off into deep water. White birches and cedars grew along the shore, and maples and beeches and hemlocks farther back from the water. The bay was protected from the northwest wind by a point of land with a dock, referred to by all the local people as Murphy's Point.
>
> . . . . . .
>
> The cottage, as Mother planned it, consisted of a living room with window seats on each side of the huge brick fireplace, a small dining room, kitchen, and two bedrooms. There was a roofed-over porch with a railing, and a hooked, hinged double gate across the front steps, which led down to the lake. The outside was white clapboard and the interior white pine. No plumbing, of course. A well was dug to the right of the cottage in the front yard. Visiting and communication were by water. Wood-burning steamers — the *Tourist,* impressive with its two decks,

its uniformed captain and engineer, and the *Outing,* a smaller steamboat — made regular trips around the lake four times a day and sometimes a moonlight excursion in the evening.

（私の両親が選んだ水辺は広い砂浜だった。この湖は程よく硬く澄んだ底をしていて，突然深くなることもなかった。白樺や杉が岸辺に沿って生え，楓やブナや栂は水辺から離れて奥にあった。入江は船着場のある岬によって北西風から守られ，その岬はマーフィ岬と土地の人々に呼ばれていた。

……

母が設計した別荘は大きな煉瓦の暖炉の両側の窓側に席がある居間と，小さな食堂と台所と二つのベッドルームから成っていた。手すりと屋根のついた玄関とかぎの付いた，蝶つがいになった二重の門扉が湖に通じる前の石段を横切っていた。家の外側は白い羽目板が張られ，内部はストローブ松材だった。勿論水道設備はなかった。井戸が前庭の別荘の右側に堀られていた。来訪や連絡は水面からだった。木材を燃やす蒸気船——二つのデッキと，ユニフォームを着た船長と機関士が印象的な「観光客」という名の船と「ピクニック」という小さめの蒸気船——が1日に4回湖を廻っていたし，時には夜に月光の下でのクルーズもした。）

ここに描かれている様子がどのように保存され，或いは又改修されているか見たかったが，それができなかったのは重ねて言うが残念なことであった。

ウインダミアを後にしてペトスキーの町へ帰る路は10㎞も一直線に続く Resort Pike Road と呼ばれる道である（P. 10の地図参照）。この道の両側は殆んど農地であるが起伏が激しく，しかも車が殆んど通らないのでドライブは実に気持がよい。開けた眺望の広大さに息を飲む。思わず車を止めて，遠く近くの景色を楽しみたくなる。この道はヘミングウエイが子供の頃 farmer の Bacon 一家の荷馬車に乗せられてペトスキーの町から帰ってきた道である。その様子は *Men Without Women* の中の "Ten Indians"（十人のインディアン）の中に次のように描かれている。

'Them Indians,' said Mrs. Garner.

They drove along. The road turned off from the main highway and went up into the hills. It was hard pulling for the horses and the boys got down and walked. The road was sandy. Nick looked back from the top of the hill by the school house. He saw the lights of Petoskey and, off across Little Traverse Bay, the lights of Harbour Springs. They climbed back in the wagon again.

'They ought to put some gravel on that stretch,' Joe Garner said. The wagon went along the road through the woods. Joe and Mrs. Garner sat close together on the front seat. Nick sat between the two boys. The road came out into a clearing.

(「あいつら，インディアンめが」とガーナーのおかみさんが言った。

荷馬車は進んでいった。道は街道からそれて，上りの丘へさしかかった。馬にはつらい坂道だったので子供達は荷馬車から下りて歩いた。砂の道だ。丘の頂きの学校の傍でニックは後ろをふりかえった。ペトスキーの町の灯と，遠くリトル・トラヴァース・ベーイの向うにハーバー・スプリングスの灯が見えた。子供達はまた荷馬車によじのぼった。

「あそこのあたりに砂利を敷きやがりやいゝに」とジョー・ガーナーは言った。荷馬車は林の中の道を行く。ジョーとおかみさんは前の席にぴったりと寄り添って座っていた。ニックは彼等の二人の男の子の間に座っていた。道は開けたところにでた。)

現在は勿論舗装されているこの道も，当時は砂けむりの立つ田舎道のようなものだっただろう。当時は道沿いに多くの林があったことがヘミングウェイの描写から想像されるが，現在ではその規模ははるかに小さくなっている感じである。ただ，うねうねと波のような起伏は往時と変わっていない。この中に名前のあがっている Joe Garner 夫妻は，実名は Henry Bacon 夫妻であり，ヘミングウェイ家の別荘から「新鮮な牛乳と卵を容易に手に入れやすいが，豚の臭いがしてくる程近くはない距離」に住んで

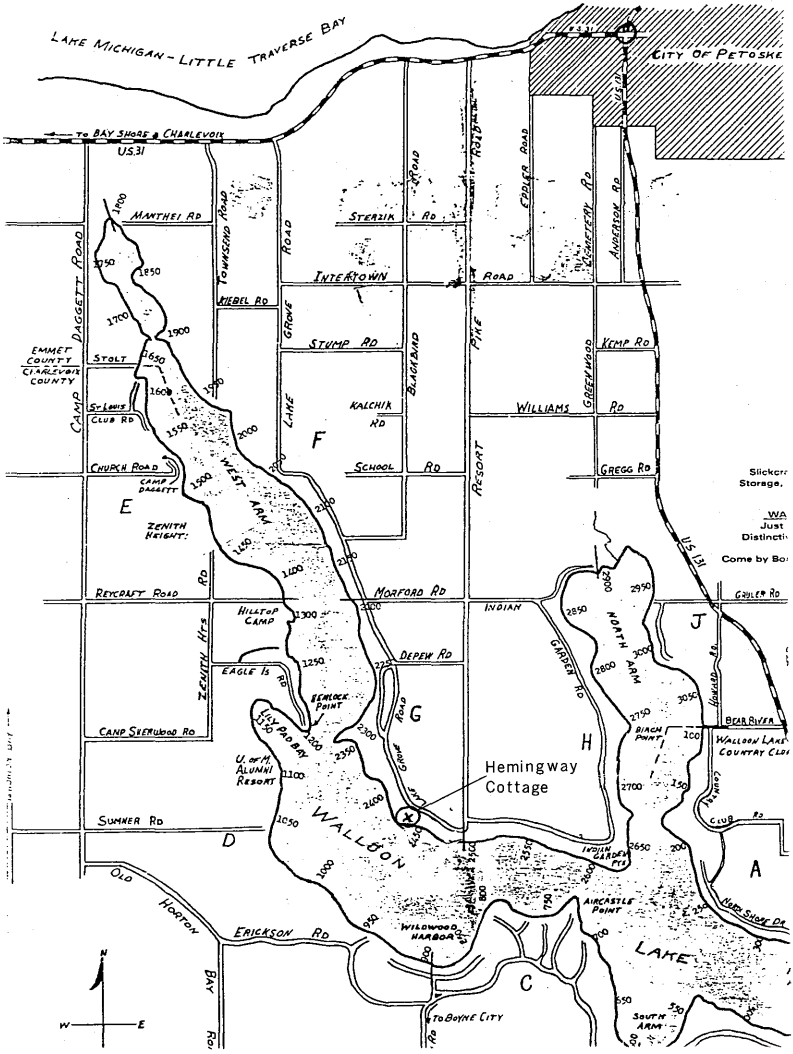
いた農家だった，と姉マーセリンは書いている。Bacon 夫妻の仲のよさが子供のヘミングウェイによってうらやましそうに描写されている。それに反してニック（即ちヘミングウェイ）が帰っていくウインダミアの中には父だけしていない。そこのところを引用していみよう。

Nick walked barefoot along the path through the meadow below the barn. The path was smooth and the dew was cool on his bare feet. He climbed a fence at the end of the meadow, went down through a ravine, his feet wet in the swamp mud, and then climbed up through the dry beech woods until he saw the lights of the cottage. He climbed over the fence and walked around to the front porch. Through the window he saw his father sitting by the table, reading in light of the big lamp. Nick opened the door and went in.

（ニックは納屋の下の牧草地を通る小路をはだしで歩いていった。路はなめらかで，露が彼のはだしの足に冷たかった。彼は牧草地の端にある棚を飛び越え，谷間になったところを下っていると，足はべとべとの土に濡れた。それから乾いた白樺の林の中を通って上って行くと別荘の明かりが見えた。彼は柵を越して正面の入口にまわった。窓を通して彼は父がテーブルに坐って大きなランプのあかりで本を読んでいるのが見えた。ニックはドアを開いて入っていった。）

ヘミングウェイがウインダミアの裏口から湖水側の正面の入口に廻る様子が手にとるように想像される。

その夜は少年ヘミングウェイが振りかえってその夜の灯りを見たペトスキー泊りである。静かなそしてある程度の歴史を感じさせるこの町のことは先にも述べたが，私達が泊った「テラス・イン」（Terrace Inn）というホテルも，この町のたたずまいにふさわしい，公園のようなミシガン湖畔に立つ，しかもあちこちに大きな樹木の点在する林間のホテルである。



ヘミングウェイ家の別荘のあるワルーン湖

ヨーロッパ風のたたずまい，それに両サイドにはフリルのある王室の寝室にあるようなベッド，こんな風雅なベッドに寝たのはアメリカ旅行中，たとえそれが名の通った五つの星のホテルであろうとお目にかかれなかっ

た。それに料金も格安であるし，朝食付で80ドルにも達しなかった。それに夕食はミシガン湖でとれた超特大の魚である。量のあまりの多さに見ただけで満腹感とはまさにこのことであろうと思った。時差ぼけの体調はその感じに追打ちをかけるのであった。残念！　半分も食べられなかったとは！　どうもアルバイト――アメリカではムーンライテング（moon-lighting）という――らしい高校生か大学生の可愛いウェイトレス達にはせっかくの御馳走をクリーンプレイトしないのは気の毒だった。

ここペトスキーの緯度は北緯46度位だろうか。それを日本にあてはめてみると北海道の北端の宗谷岬となる。サマータイムとはいえ10時になってもまだ明るい理由はそこにある。夕食後再びミシガン湖畔に出てあたりの景色を眺める。実に美しいし，又ごみが落ちていない。あたりは9月1日というのにセーターが必要な程ひんやりとしている。昨夜があまりよく眠れなかったので，早めに床に就いた。

3．シーニー（Seney）と“Big Two-Hearted River”

翌朝ペトスキーを出発し Upper Michigan に向かう。Lower Michigan の最北端マッキーノー市（Mackinaw City）と Upper Michigan の入口にあるセント・イグナス（St Ignace）との間の水峡は左にミシガン湖，右にヒューロン湖という地形で，ここに長い吊り橋がかかっている。十数分かかってこの長い橋を渡って北ミシガンに入ると，風景は一変する。全くの森林地帯である。しかも森林地帯とはいえ日本と異って山が殆どない。ゆるやかな傾斜はあるにはあるが，殆んど平らな地面に林が続くのである。私達はヘミングウェイの有名な短篇「大きな二つの心の川」の舞台となった Seney の町をめざして車を走らせている。ここも殆んど真直ぐな道で走る車もまばらである。走っているのは国道2号線――US-2と呼んでいる――なのだが，道の両側にある大きな木の枝が樹木のトンネルをつくっているのである。それらの大部分は落葉樹で，9月始めにもかか

わらず，少し色づいている葉もある。その森のあまりの美しさに車を止めてしばし林間を眺め入る。写真にとりたい衝動にかられる。そういえばミシガン州のカレンダーは，美しい四季の自然を撮ったものが多かった。9月の下旬頃にここに来れば神の存在を信じさせる光景やもしれぬ。

一生忘れることができないと思われるこの US-2 を3時間あまり走った後，州道77号線に入ってシーニーに着く。かつて林業が盛んだった頃，——19世紀後半——ここには3000人の住民がいたということだが，今ではたった200人。ここに掲げる Seney Country Inn のレストランのリーフレット（P. 13）が往時をしのばせてくれる。このリーフレットは現在と過去のシーニーを語ってくれていて興味深いと思われるのであえて掲載することにした。

そしてここにアメリカ北部地方の森を詠った19世紀アメリカ詩人ヘンリー・ディヴィド・ソローの詩を紹介しよう。まさにこれこそ北ミシガンの森の描写だ。

I long for wilderness, a nature which I can not put my foot through, woods where the wood thrush forever sings, where the hours are early morning ones, and there is dew on the grass, and the day is forever unproved....

Henry David Thoreau
From the *Journals*

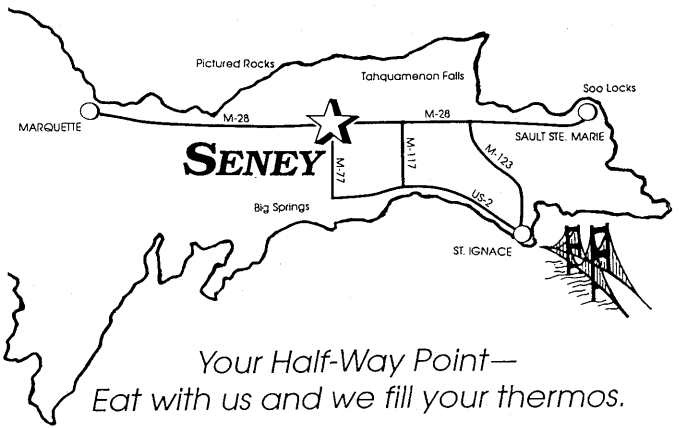
（私は森にあこがれる。足をふみ入れるのもはばかれる自然。ツグミの声がいつも聞かれる森。そこでは時はいつも早朝のようだ。草には露が下り，昼間というもの永遠に証明されず……）

Seney のリーフレットの左頁の下に famous visitor としてヘミングウェ

Seney Country Inn Mid-Point Restaurant & Motel

(Pets Welcome)

(906) 499-3376 • (906) 499-3388



Your Half-Way Point—
Eat with us and we fill your thermos.

Professional Catering Services Available

A BRIEF HISTORY OF "SENEY"

(When the Pine was On)

You're currently in a very historic townsite of the lumbering era, dating from 1879 when the Detroit, Mackinaw & Marquette Railroad started to build the existing Soo Line that is all through the Upper Peninsula. The name "Seney" was the name of one of the directors of the railroad. We are told that McMillan was named after the treasurer and Newberry for the engineer who laid out the railroad line. The Detroit, Mackinaw & Marquette Railroad was later sold through a land foreclosure sale to the Duluth Southshore Railway Company.

Seney by 1882 was busy with the logging as it moved here from farther south in the state, as did the men from the other lumber camps, accompanied by the various business men from down below and some local upstarts.

Our little town was then populated by 3000 residents, complete with stores, hotels, drug store, 21 licensed saloons and seven or eight blind pigs (unlicensed bars) and four boredello's that can be confirmed from certain heresay. Seney was built on cedar posts as most of the land was swamp and the town had a three foot boardwalk in front of most buildings. Animals roamed the streets at will, especially pigs. We're told if someone wanted one they would just go outside and shoot it. The pine was logged during the winter months because that's when they could move it about with some ease by horse and sled. There were many lumber camps here. Spring meant running the logs down the Fox River and the Manistique River to the mills. They say most of this lumber went to rebuild Chicago after the fire. However some logs were square cut and hauled to Devil's Slide in Grand Marais at Lake Superior, 25 miles north of Seney, where they were shipped to England.

Roads were quite poor and it would take as long as five to eight hours to travel to Newberry, 26 miles east. But a train ticket to Detroit cost $8.60 and one cent more to Woodward Ave. Around the tenth of November every year prior to the annual deer hunting season, railroad records indicate that between 600 and 700 hunters would get off the train daily to hunt this area. By the 20th of November, the railroad would start shipping down state the deer that were taken, 150 a day to as many as 400 or 500 a day by Thanksgiving, totalling in excess of 2000 deer from the surrounding area per year.

Famous visitor: The year 1919, coming from some point west, maybe Marquette, Ernest Hemingway got off the train in Seney carrying a heavy pack sack. He asked the railroad telegrapher where the Fox River was and was shown by one of our current senior residents. Mr. Hemingway moved later that day up M-77 to the east branch of the Fox River to a tent settlement of blueberry pickers who were shipping to market their harvest. He pitched his tent and spent the night.

イについての記述がある。外の visitor については何も書かれていないからここを訪れた有名人はヘミングウェイだけなのだろう。彼がここシーニーを訪れたのは彼が20才で，イタリヤ戦線から帰還して，ウインダミアとペトスキーで戦傷を癒している時であった。そしてその中には彼がミラノの病院で知りあった看護婦アグネス・クロウスキー（Agnes Kurowsky）への失恋からの痛手もあったろう。

ヘミングウェイはシーニーで汽車を降りて鱒釣りにでかけるのだが，「大きな二つの心の川」は彼が汽車から降り立った時は一面焼けの原となったシーニーの町の描写で始まっている。1919年にこの町に大火があったかどうか，シーニーで2，3の人に尋ねてみたが，知らないということだった。何しろ70年も前のことなので，それも当然かも知れない。しかしヘミングウェイの書き方から考えると，それは事実であったと思われる。

Seney Country Inn のレストランで昼食をとり，ヘミングウェイが鱒釣りをしたという Fox River に向かって更に北に車を走らせる。このあたりも所々に開けたところがある位でどこまでも続く森であり，林である。やがて『Fox River』という看板のある橋に着く。車を降り川岸をたどってみる。しかし時間もあまりないので，長居はできない。ヘミングウェイの作品の名前である“Big Two-Hearted River”は実はもっと北のスーペリヤ湖に注ぐ川なのだが，ヘミングウェイはその川の名のイメージが当時の彼自身の心象に最もふさわしいと思ったのか，借用したように私は思う。「狐の川」では全くお手あげだから——。彼は更に当時の気持と思われるものを次のように作品の中にとどめている。

> His muscles ached and the day was hot, but Nick felt happy. He felt he had left everyhing behind, the need for thinking, the need to write, other needs. It was all back of him.

（（重い荷物のために）肩は痛く，太陽は照りつけたが，ニックはいい気分だった。彼はすべてを後に残してきたと感じ，考えることも，書くことも，その他のこともみんな彼のうしろにあると思った。）

ニックが見たように，Fox River には鱒の姿がみられた。鱒釣りの釣人も来ているらしかった。もっと時間があったら彼がたどりついた沼地まで行けるのだが，と思いながら後髪を引かれる思いで車の向きを変えた。

アン・アーバーへ帰り着いたのは午後10時だった。昨日ここを出てから合計1200〜1300kmを走ったようである。

4．ニュー・オーリアンズへ

9月2日と3日はアン・アーバーで休息をとり，その間 University of Michigan と，いわゆる University District を見て歩いた。University of Michigan はアメリカでも十指の中に入る大学といわれていて，その中の日本語学科も有名である。9月2日は Labor Day なので休日なのだが，図書館は開館していて古色蒼然なる建物の内部に，ローソクに似た照明が灯っていて，多くの人達が読書に余念がない。又9月に新学期を迎えるアメリカでは新入生達が親子連れでキャンパスの見学や書籍の購入などに忙しいらしかった。私も University District の Borders という本屋で何冊かの本を買った。これは早速船送りにするつもりである。

さて，9月3日の午後には，14年前からの友人である Mrs Gnodtke と息子の John の訪問を受けた。手紙などの交換はずっと続けてきたのだが，実際に顔を合わせるのは14年振りで，何だか面はゆい感じがした。John は先程述べたミシガン大学の学生である。ちなみに彼は今（Sep. 1993-Aug. 1994）群馬県の高崎市で AET（Assistant English Teacher）をしている。そして今年（1933年）の11月にはこの Gnodtke 夫妻を我が家に迎えることになるのであった。

9月4日。いよいよアメリカ南部の二つの目的地 New Orleans と Key West に向かって出発の日である。昨夜はやや興奮気味のためかよく眠れなかった。長い一人旅の始まりである。息子に励まされ，嫁さんに見送られてデトロイト空港から一路南へと機上の人となった。飛行中のことはあまり記憶にない。ただ，この国内便のスチュアデスが，東洋系の airline のスチュアデス程愛嬌がよくないなあ，と感じたことだけは頭に残っている。それに年令も概して高い女性が多い。

ニューオーリンズ空港に着いてタクシーに乗る。タクシーのドライバーはよく話しかける。それ程聞き取れない南部なまりでもない。日本から来た，というと日本のことなどについて尋ねたりする。ここは緯度は30度，日本では屋久島と同じである。だから，殆んど毎日のように夕立があるのもうなづけるというものだ。外出には傘は欠かせない。

私の泊まったホテルはフレンチ・クオーターという有名な観光名所の中でも最もにぎやかな Bourbon Street にあった。フレンチ・クオーターというは1803年アメリカのルイヂアナ買収によるまで，この地がスペイン領，フランス領であったことの名ごりである。主としてフランス人の建てた建物が現在残っており，良く保存されていて，十九世紀の雰囲気を完璧といってもいい程漂わせている。オフィスを思わせるような建物や，高層建築は勿論なく，それぞれ趣向をこらした家々が飽くことのない街並を形づくっている。そしてこの界隈は夜になる程賑やかになってくる。丁度日本のお祭の夜のようだ。そしてそれが毎日毎晩である。太鼓ならぬニュー・オーリアンズジャズが遠く近く聞こえてくる。夜になるとあやしいネオンがともり，人々がそぞろ歩く。観光客はみやげ物屋に立寄る。又ある者はグラス片手にショウを楽しむ。ただあまり調子にのって気をゆるめないことも大切だ。

さて話を私の泊ったホテルに戻そう。このホテルは私のアメリカで泊ったホテルのうちでペトスキーのテラス・インと共に最も気に入ったホテル

である。概して気持を落ちつかせてくれる楽しいホテルはあまり大都市の中心にはないものだ。しかも値段も reasonable である。このホテルは Landmark Hotel ともいったが，三階建で，各部屋にベランダが付いており，ベランダの椅子に座ってフレンチ・クオーターを見渡すことができた。蔦で家の半分が覆われた家もある。部屋の内部はといえば，広いスペイスにダブルベッドが二つ置かれていて，そこに一人で寝るわけだ。二人で泊れば一人分がそれだけ安くなるのだろうが，一人でも十分楽しい装飾である。一人泊るには大き過ぎるという程でもない。こんな部屋を思い浮べる時，最近の日本のビジネスホテルの狭く，ユニットのバスのついた部屋など反吐が出そうになるというものだ。勿論このホテルにはバーがあって何時なんどきでもハードドリンクを楽しむことができるし，朝食や夕食はレストランでといった次第。ただレストランのウェイトレスは大部分黒人の若い女性だった。愛想はあまりよくなかったが，それも何らかの理由があるのだろう。ただメニューだけは珍らしい南部の献立に舌鼓をうったのは間違いない。米はいわゆるインディカ米で細長いものだったが，これはタイなどと同じように暑い地方ではこの種の米が口に合うのである。カレーライスや焼飯などのことを考えてみると——。

さて，文学に関係のない話になったが，実は全然関係がないというわけではない。このフレンチ・クオーターこそテネシー・ウイリアムズの『欲望という名の電車』の舞台なのである。

EUNICE [*Finally*]:
What's the matter, honey? Are you lost?
BLANCHE [*with faintly hysterical humor*]:
They told me to take a street—car named Desire, and then transfer to one called Cemeteries and ride six blocks and get off at —Elysian Fields!
EUNICE:
That's where you are now.
BLANCHE:

At Elysian Fields?

EUNICE:

This here is Elysian Fields.

BLANCHE:

They mustn't have — understood — what number I wanted...

EUNICE:

What number you lookin' for?

[*Blanche wearily refers to the slip of paper.*]

BLANCHE:

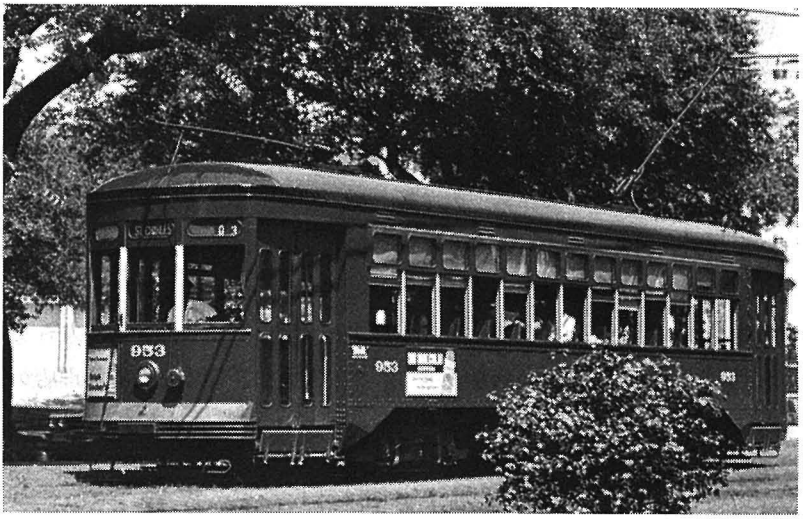
Six thirty-two.

EUNICE:

You don't have to look no further.

（ユーニス：（遂に）どうしたの，お前さん？　道に迷ったのかい？
ブランチ：（ややヒステリー気味にユーモアを交えて）「欲望」という名の電車に乗って，「墓場」という電車に乗りかえて，6区画ほど行って「極楽」というところで降りるように言われたんです。
ユーニス：それはお前さんのいるところだよ。
ブランチ：私が「極楽」に？
ユーニス：ここがその「極楽」というところさ。
ブランチ：私が何番地の家を尋ねているのか，教えてくれた人は知らなかったんだわ。
ユーニス：お前さんは何番地を探しているんだい？
ブランチ：632番地です。
ユーニス：お前さんはもう探さなくてもいいよ。）

この Elysian Fields 632番地というところは確かに存在する。フランチ・クオーターのはずれにあった。しかし，ブランチが尋ねていってしばらく住んだ形跡のあるような家はそこにはなかった。しかしこのドラマに描かれているような家はたしかにフランチ・クオーター内にはそこゝに現存している。真実らしい嘘を語るのが，優れた作家の手法でもあるのだ。



映画『欲望という名の電車』に使われたニュー・オーリアンズの streetcar。現在は Elysian Fields の近くに保存されている。

『欲望』には，ヒロインのブランチが Garden District からやってきた女のようだ，という描写がある。下町風のフレンチ・クオーターに比べるとニュー・オーリアンズの西側に広がる高級住宅地 Garden District は著しい対照をなしている。まさに大邸宅が次から次へと並んでいて，まさにメルヘンチック，まさにおとぎの国へ来た感がある。これらの邸宅にどんな人達が住み，どうしてこれらを維持していく収入を得ているのかと考えさせられてしまう。この uptown area にあの streetcar が走っているのである。この古い市街電車の車輛と近代的住宅とが又面白いコントラストをなしている。ウイリアムズは自分が一番好きなアメリカの町はニュー・オーリアンズだと言っているが，この驚くべき落差もニュー・オーリアンズの魅力の一つとなっている。そしてこの Garden District には Tulane University という有名な私立の大学がある。ここには TESL（Tulane's English as a Second Lauguage）という College があり，英語の集中講義を行っている。この大学はヘミングウェイの親友であり，彼の短篇に多

く登場する Bill Smith の父親が数学などを教えていたところでもある。設立は1834年と記されている。

このニュー・オーリアンズが名物の Streetcar に『欲望という名の電車』のヒロインのブランチよろしく乗ってみると，一番驚いたのは乗客の多様さであった。全く西洋系，東洋系，ラテン系，アフリカ系と同じ位の割合を占めているということだった。やがて私は Business District に到着し，33階のビルの展望台からミシシッピーの大河を見下す。大きな船が雄然と航行している。南はメキシコ湾のはずだが，まだ遠く彼方らしい。中華料理店に入って焼飯を食べる。アメリカの都市では日本料理店がかなり営業しているのだが，ニュー・オーリアンズだけはあまり見当らなかった。

フレンチ・クオーターの南東にある French Market は是非ぶらついてみたいところだ。みやげ品から果物まで，ありとあらゆる商品が並んでいるし，マーケットというだけあって庶民的な感じである。両側に露店風の店の並ぶ間の通路を人々がぞろぞろと商品をあるいは眺め，あるいは手に取って品定めをする。そこの近くの大道で演奏するジャズが聞えてくるのは何とも言えない気分である。その日は急に雨になりカバンを傘代わりに頭にのせてホテルに帰る。途中の街角に大道芸人の姿がある。夕立後の夜は涼しくさわやかだ。

ある一日，フレンチ・クオーターの Louis Street にある Antoine's Restraunt に昼食を食べに行く。ここはこの町一番の老舗である。expensive らしいが，ニュー・オーリアンズに来た記念と話のたねにと思い切って扉をあける。思ったより狭いように思ったが高級感はある。大男の老ウエイターが蝶ネクタイ姿でオーダーを求めるし，一寸圧倒された感じである。ニュー・オーリアンズ名物の Gumbo という料理を注文する。これは Soup なので Antre として魚を注文したが，量が多く，全部食べ切れなかった。Gumbo とサラダにパン位でよかったように思う。

ニュー・オーリンズを去る前の日，もう一つの名物料理 Jambalaya を

食べに Gombo Shop というところへ出かけた。これは味が強すぎる。それにこれも又量が多い。アメリカ人の体を維持するにはこれ位必要かも知れないがそれにしても肥り過ぎの人達が多いことを思うと，腹八分目にしておけばいいのにと余計な心配をする。

さあ，明日は Key West だ。

5．キー・ウエストと Hemingway Home

ニュー・オーリアンズを早朝に出発し，マイアミで飛行機を乗り換える。ここからキー・ウエストまではプロペラ機である。それも SL に乗ったような感じで珍しい。プロペラ機はあまり高度をあげないので眼下に拡がるパノラマが美しい。マイアミ・ビーチの海岸線が孤を描いてみえる。藍色の大西洋と緑の陸地が目にやさしく，しかもあざやかに入ってくる。機上からの景色の変化に目を奪われているうちに，やがて陸地がなくなり，島が点在するようになるあたりで，雲が視界をさえぎると同時に雨になったようだ。キー・ウエストの飛行場に着いた時は雨が激しく降っていた。ここで昼食をとり，タクシーでホテルの Holiday Inn に向かった。私がこの島にやってきたのは勿論ヘミングウェイの家やテネシー・ウイリアムズの家を訪ねてみることだった。

しかしここで少しこのキー・ウエストについて述べておこう。

キー・ウエストはアメリカ最南端にある人口4万人程度の島であり，緯度は24度位だから台湾の中央部に匹敵する。かつてはスペイン人の領するところにあったが，1822年アメリカ領となった。アメリカ本土からキー・ウエストまでは大小合せて42個の橋が国道 US-1 を形づくっている。本土とキー・ウエストの間にある小さな島々は fishing と swimming の最適地である。又，キューバや，西インド諸島，バハマ諸島などの雰囲気をも漂わせるこのキー・ウエストは一大観光の島でもある。

私の泊った Holiday Inn は島の北端にあり，Key West の downtown

は南側にあって，しかも Hemingway Home もこの downtown にあったので，歩いて行くには遠すぎた。どうしようかと考えているうちに，島を一周するバスがあることを知り，それを利用することができた。Holiday Inn というのはアメリカ中どこでも大抵そうなのだが Motor Inn なのである。又若い人達は貸バイクなどを利用していた。しかしこの Holiday Inn には Hemingway Cafe というレストランがあったので，何となく親しみが湧いてきた。全体的なサービスも悪くないし，食事の内容もよかった。値段もリーゾナブルであった。到着した9月8日は降りしきる南国の雨の音を聞きながら，広い部屋——ここも二つのベッドが置かれていた——の中で新聞を読んだり，スケジュールを練ったりして過した。部屋の外の open corridor に沿って熱帯植物があざやかな緑を誇っていた。

キー・ウエストの地図のなかに Kyushu という名の Japanese Restraunt を見つけ，バスで夕食を食べに出かけることにした。

まだ30代のこのレストランのあるじは，三重県出身で，あるフランス人からこの店を譲り受けたそうだが，スペイン系の従業員を使って店を運営していた。日本料理なら刺し身，すしなど何でもある。そしてその味の何とすばらしいこと，「この魚の味は日本以上ですね」というと，彼は「日本からきた人の皆さんがそうおっしゃいます」と言う。考えてみるに，このあたりの海の自然が，そのような魚の味をつくりだしているのだろう。ちなみに Kyushu という店の名はアメリカの南に位置する Key West と日本の南に位置する九州との類似によって名付けたのだそうだ。

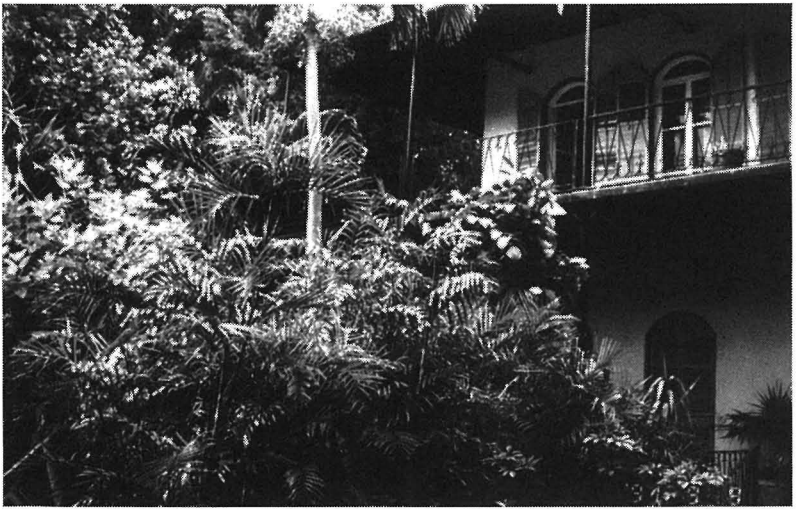
いよいよ明けて9月9日，ヘミングウェイ・ホームをめざす。この Home and Museum のある場所はホワイトヘッド通りなので，やはりバスに乗って出かける。この島の景色などを眺めながらバスは南へと進む。For Sale という売り家の看板がよく目につく。本でも書くのならヘミングウェイのようにこの島に2・3年住むのもいいなあ，と思う。私は後に New Zealand を訪れた時もそのように思ったりした。

やがてバスを降り，Hemingway Home を探しあてる。なにがしかの入場料で必要だ。既にこの屋敷は多くの観光客でにぎわっている。そうでなければ数人の管理人を置いておくことはできないであろう。年に50万人がつめかけるという。一月に平均すると1,400人である。バニヤン，ヤシ，サボテンがうっそうと庭に茂っている。色々の種類のネコがわが物顔に闊歩している。これはネコをこの上なく愛したヘミングウェイの遺産である。何故ヘミングウェイがこれ程までにネコを愛したのか，これは研究の対象にもなりそうである。ヘミングウェイが使ったベッド，机，タイプライター，それにキチンまでよく保存されている。多くの日本からの来訪者にも出会った。ヘミングウェイはキー・ウエストに1928年から1939年まで12年間住み，『武器よさらば』『アフリカの緑の丘』『午後の死』『持つと持たぬと』『キリマンジャロの雪』「マコーマー事件」『御五列』『誰が為に鐘は鳴る』などの中，長篇やその他多くの短篇を書いた。そして，彼の行きつけのバー，「スロッピー・ジョー」の経営者ジョー・ラッセルから大物釣りに誘われ，それがカジキ釣りにとりつかれる結果となり，最終的には『老人と海』へとつながっていくことになる。それではこのキー・ウエストでのヘミングウェイの最初の長篇となった *A Farewell to Arms* の一節を書き出してみよう。ヘミングウェイがはるかイタリヤ戦線を追想しながら書き始めたわけだが，そこには初恋の人とも言えるアグネスの面影がなくかしくだぶっていたに違いない。

I looked in her eyes and put my arm around her as I had before and kissed her. I kissed her hard and held her tight and tried to open her lips; they were closed tight. I was still angry and as I held her suddenly she shivered. I held her close against me and could feel her heart beating and her lips opened and her head went back against my hand and then she was crying on my shoulder.

"Oh, darling," she said. "You will be good to me, won't you?"

（ぼくは彼女の眼を見いって，まえにしたように彼女のまわりに腕をまわして



Hemingway House

彼女にキスをした。彼女に激しくキスをし，強く抱きしめ，彼女の唇を開こうとした。唇は固く閉じられていた。ぼくはまだ腹を立てていて，突然彼女を抱いたので彼女は身をふるわせた。ぼくが彼女を強く抱きしめると彼女の心臓の鼓動が感じられ，彼女の唇は開いて彼女の頭はぼくの手にもたれかかり，やがて彼女はぼくの肩に顔をあてて泣いていた。

「ねえ，あなた，私にやさしくして下さるわね？」と彼女はいった。）

さて「スロッピー・ジョー」という酒場にも行ってみた。比較的大衆的な広い店である。まだ早い時間だったが，飲物はいつでも飲める。バンドは準備中だった。そこはデュアル・ストリート20番地。ヘミングウェイのロマンを求める人々がラテンのリズムに身をゆだねる。壁は至る所ヘミングウェイを偲ばせる張り紙で一杯だ。このデュアル・ストリートあたりが downtown の中心部だ。土産物店や特産物を売っている店が多い。土産物ではやはり他の地では買えないような海でとれる装飾品などはすばらしい。

キー・ウエストにはテネシン・ウィリアムズもしばらく住んでいた。ヘミングウェイ程長くはなかったが彼もまたこのアメリカ最南端の島にあこがれてやってきたのであろう。しかし今はテネシーを記念するものは美術館以外あまり残っていないし，勿論彼が住んでいた家もさびしげに For Sale の看板が立っている有様である。Hemingway の家と比べてもかなり見劣りがする。私が島のほぼ中央にある——これは繁華街から離れていることを意味する。ダウンタウンは南にあるのだから——テネシーの家を訪ねた時も誰一人あたりにはいなかった。立札もない。そのあたりの人にたずねたら教えてくれたので，近所の人はその程度は知っているのだろう。ウィリアムがよく通ったという Tony's という酒場にも行ってみた。この方は Sloppy Joe's 程広くはない。しかし店のいたる所に骨董品が飾られていたのは日本にもよくある光景だった。勿論ウィリアムズをよく知っているこの店の owner は，13人の子供を持ち，（勿論一人の女性によるのではない）何回か選挙で市長に挑戦して，今ようやくこのキー・ウエストの市長職に輝いている人物である。さすがアメリカ，さすがキー・ウエストといった感じである。

6．首都ワシントン

9月10日キー・ウエストを発ち，マイアミに向かう。キー・ウエストからマイアミまでは今度はバスに乗ることにした。バスは言うまでもなく Gray Hound。さきにも述べたように連なる島を US-1 が結んでいる。途中2ヶ所ばかり大きな橋がある。美しい左右の海と島を眺めているうちにマイアミの bus center に着く。マイアミでは Hilton Hotel に予約をしておいた。こういう有名なリゾート地で，高名なチェーンホテルがどんなものか確かめたかったからである。ヒルトンホテルはバスセンターからかなり離れて，マイアミビーチにある。マイアミの old town はかなり危険だという。そういえばそんな雰囲気である。しかしビーチは高級ホテル

が立並ぶ別世界といったところである。ヒルトンホテルはホテルそのものが一つの町を形成している感じで，shopping mall があり，レストラン街があり，それに大プールがある。勿論ビーチにも部屋から水着のままで泳ぎにいくことができる。椰子の木がプールサイドを覆い，滝がプールに注ぐ。ロビーではスペイン語が大勢を占める。客が全部金持ちのようでもなかったが，夕食のレストランではやはりすべてがドレスアップして，luxurious な dinner を楽しんでいる風だった。こういうレストランでは照明はローソクのみであるようだった。

あくる9月11日，いよいよ長い汽車の旅の始まりである。アメリカは汽車の運行が punctual でないのは時にはいらいらするが，列車の内部そのものは悪くない。私の息子達はあまりアメリカの汽車に乗らないようだが，私の鉄道好きも一つには世代の違いかも知れない。

マイアミからワシントン DC に向けて列車は一日一本運行する。*Silver Star* という名のこの長距離列車は14時20分マイアミ駅を出発した。マイアミ駅で印象に残ったのは切符を発売する窓口のガラスが防弾ガラスだということだった。アメリカ中どこもそうではない。私の経験ではこのマイアミだけだった。そのためか，列車に乗ってからも緊張がしばらく続いたが，夜になってくるとそれも忘れて眠りに落ちていた。

Silver Star は翌9月12日午後2時過ぎに首都ワシントン駅に到着した。約24時間，丸一日の旅であった。この沿線は主として平野や丘陵地の続くところで海岸線もなく松林が多かった。勿論農地も広がっていた。日本の松を喰い荒している松喰虫の被害は見られなかった。

ワシントンの街路にはアメリカ全州の名前がつけられている。私の泊まった Mayflower Hotel はコネティカット・アベニューにあった。このメイフラワー・ホテルも五つ星ホテルで，ヒルトン・マイアミよりも格式は上かもしれない。何しろ Mayflower 号から名前を取っているのだか

ら。ロビーやホールには今までにここに宿泊した有名人や政治家の写真がぎっしりと飾られている。廊下などは写真でも撮りたくなる程の豪華さである。一泊3万円位である。しかしそれが weekend になると2万円位になる。ワシントンならではのことである。ここには地方からの出張族が滞在するのであろう。その表面のはなやかさとは裏腹にここで気分を害することがあった。従業員のいたずらか何か知らないがワシントンではもっと庶民的なホテルを選ぶべきだったのだ。そういえばこのあたりは東京でいえば丸の内，赤坂あたりか，いやそれよりももっとおすましの感じがした。高級なブティックなども軒をつらねていて，値段も相当 expensive だ。

夕食はホテル内で食べてみた。bill は gratuity（心付け）という欄がある時はここにマークしておくと receipt の中で自動的に引かれているので，テーブルの上にチップを現金で残す必要はないという話を聞いた。このことについてあるアメリカ人に尋ねてみたところ，テーブルに残すべきだ，とその人は言った。又私の息子は高級ホテルではそれなりの値段を取っているのだから，チップは必要ないだろう，という。このあたりの基準は仲々難しい。

ワシントンではスミソニアン博物館が有名である。スミソニアン博物館はいくつものビルから成り立っていて，それぞれの分野に別れている。全部見て歩くには二，三日はかかるらしい。科学博物館は私には珍しかった。ここにはアポロ宇宙船などの最初のアメリカの足跡があますところなく陳列されている。だが自然史博物館などはむしろ New York の方がいいかも知れない。この博物館めぐりではスペイン系アメリカ娘と知合いになり，彼女が親切にいろいろと補足説明をしてくれたので大いに助かった。彼女はテキサス州 San Antonio に住んでいるという。そしてワシントンは三度目だ，とも言った。

次の日はいろいろのモニュメントを見て廻った。White House，国会議

事堂，最高裁判所，Lincoln Memorial，Washington Monument。アメリカ連邦政治の中心及び歴史的記念碑。これらがみんな一般に公開されていて，世界各地からやってきた人達が，見物のために長蛇の列をなして

never forget what they did here. It is for us the living, rather, to be dedicated here to the unfinished work which they who fought here have thus far so nobly advanced. It is rather for us to be here dedicated to the great task remaining before us — that from these honored dead we take increased devotion to that cause for which they gave the last full measure of devotion — that we here highly resolve that these dead shall not have died in vain — that this nation, under God, shall have a new birth of freedom — and that government of the people, by the people, for the people, shall not perish from the earth.

Abraham Lincoln.

November 19, 1863.

いる。こういう三権の頂点となる建造物を何の制限もなく見られるということは，政治を身近に感じるのにどれだけ寄与していることだろう。Capitol と Washington Monument と Lincoln Memorial は Potomac Park の中に一直線上に並んでいて，Washington Monument にのぼるとワシント

ンの町がそこから放射線のように拡がっているのがわかる。ここでは Lincoln Memorial に刻まれているあの有名な Gettysburg Address の最後の部分を Lincoln の自筆で紹介しよう（左頁)。

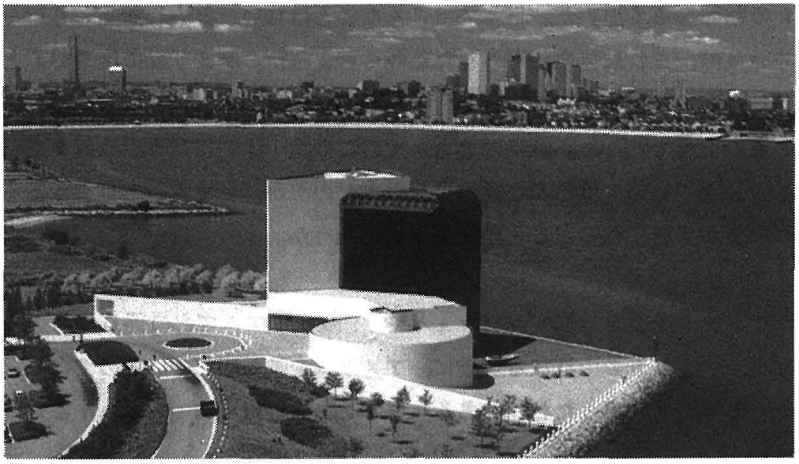
リンカーンの理想がかかげられるワシントンにホームレスの人達が多く目につくのは皮肉である。街角を曲って main street から少しはずれると路ばたにブリキ缶を前にきたならしい恰好をした主として中年の男達が坐っている。夜になると公園に行き，そこを宿とするようである。アメリカの恥部をみる思いだ。日本ではこんなことはない，と内心誇らしく思っていたが，これは見事に打ちくだかれてしまった。アメリカの後をいくといわれる日本さながらに東京の日比谷公園にははやホームレスが出現しているのを後で知った。戦後はともかく，この数十年間はこういう人々を日本の公園や街路では殆んど見かけなかったのだが，富める者と富まざる者の乖離が大きくなったことの結果なのだろうか。

ワシントンＤＣはヘミングウェイやＴ．ウイリアムズとの係りはなかったが，アメリカの中枢なるが故に，アメリカを映し出しているのではないか，と考えて立寄ったわけである。ワシントンには George Town という old town がある。そこはワシントンが首都となる前からの町であり，古きよき時代の雰囲気が多分にのこっている。それ故に，ワシントンDCにはさまざまな面があり，アメリカの現代と過去を，表と裏を，光と陰をあわせ持っているということができよう。ヘミングウェイも亦しかり。そしてヘミングウェイがお気に入りの作家だったジョン．F.ケネディ大統領も又そうであった。

7．ボストンへ

ボストンにはケネディ大統領を記念して建てられた *Kennedy Library and Museum* がある。ケネディ大統領がボストンの地に生まれ育ったか

らであり，そして彼が卒業したいハーバード大学も勿論このボストンにあるのはいうまでもない。*Kennedy Library and Museum* も始めハーバードのキャンパス内に建てられる計画がなされたが，キャンパスがもう手狭なために，それは断念されて Central Boston を見渡すことのできる郊外に建てられた。ここにくるとケネディについてのすべてを知ることができる。ケネディに関するビデオなどもたえず放映されている。そしてこの建物の中にケネディ大統領が愛したヘミングウェイにちなんで Hemingway



手前ケネディ図書館兼博物館と向こうにボストン中心部

Room が特設され，ヘミングウェイに関する大資料が集められている。彼の手書きの原稿は勿論のこと，アフリカの狩猟でしとめた猛獣の皮や剥製など，それに勿論初刷本や手紙，そしてあらゆる批評書に至るまで。ここに来ればヘミングウェイに関してあらゆることを調べることができる。それ故ヘミングウェイ研究者は，ボストンに滞在してこの Hemingway Room に足を運ぶのである。そのためには勿論一年位の期間が必要であろう。

ここでついでながら，ボストンの町の印象を一言で述べるとすればそれ

は日本の京都だということだろう。京都とボストンが姉妹都市であるというのもうなずける。古いものと新しいものが美しく共存しているし，ボストン市民もそれを誇りにし，そしてその美しさを維持し，更によりよくしようと努力しているように思えた。街全体に花が咲き乱れ，18〜19世紀の建物が大切に保存されながら，しかも生活している。ごみなど道に落ちてはいない。しかもそれでいてワシントンのような何となくとりすましたところがなく暖い感じがする。又ボストンは19世紀のアメリカ文学の中心地である。Nathaniel Hawthorne などの小説家や Ralph Emerson, Henry Thoreau などの思想家や詩人などのふるさとである。ホーソンの有名な『緋文字』などもボストンが舞台である。更に17〜18世紀のたたずまいをその目でみたい人はボストンから大西洋岸に沿って北へ Salem の町を訪れる。私もアメリカの歴史の匂いを嗅ぐ人達の仲間入りをして，遠く17世紀の家々の並ぶ村道を歩いた。又 Plymouth にも赴いてイギリスから贈られたという *Mayflower* 2世号をも見物した。しかし，これらはこの表題外のことでもあり，私の専門でもないので，それにあまり紙面を費すのもはばかれるのでここで筆を置くことにしたい。

以上ヘミングウェイの足跡を主としてたどってきたが，アメリカでは彼がその61歳の一生を終えた Idaho の地を訪れていないし，又フランスやスペイン，イタリア，スイス，それにアフリカーキリマンジャローとキューバが残っている。そうみると，私のヘミングウェイを追いかける旅はまだまだ道遠しという感，切なるものがある。

あとがき

文学作品の舞台を訪ねることの意義は言うまでもなく，その作品をよく理解せんがためである。私のこのたびの旅ほどこのことを痛切に感じたことはない。私が文学作品を読む場合，もし私がその作品の舞台を訪れていれば，私は作品と一体になり，あたかも作者自身であるかの如くその作品

について語ることができる。否作者は作品で語るのだから，口では語らないだろう。そこに我々批評家？の出る幕がある。又，作品を翻訳するにしてもその地を知らなければ正しく，情感をこめて訳出することはできない。例えばヘミングウェイ家のワルーン湖畔の別荘を「小屋」と訳したのでは決してその情景が正しく伝わってこないし，作品を味わう興味は全くといっていい程失われる。「十人のインディアン」にしても，Nick が乗った農事用ワゴンの通る道は実際にこの目で見ることによって生きた場面となる。『欲望という名の電車』にしても，ヒロインのブランチは Garden District からやってきた，フレンチ・クオーターには似つかわしくない女，という風に卜書きされているが，ニュー・オーリアンズの Garden District のメルヘンチックな屋敷の立ちならぶ山の手のたたずまいを目でみて始めてブランチという女のイメージが湧いてくるのである。逆にフレンチ・クオーターを見ればそれとは反対のスタンレーのキャラクターができあがるのである。私はもっと早くこのような文学の旅ができなかったかを残念に思うのだが，文学研究家や愛好家達に，できるだけ早く作品の舞台を訪ねて，作品を正しく理解し，又作品を十倍も楽しく味わって欲しいものだとねがう次第である。